

岩波書店の月刊誌『世界』の2月号に、近代天皇制研究を専門にしている京都大学人文科学研究所教授の高木博志氏が「近代天皇制と『史実と神話』 代替わりに考える」を寄稿している。最初に「2019年11月14日、15日と皇居に造営された大嘗宮において徳仁天皇は神となる儀式を行った。その後、徳仁天皇および雅子皇后は、即位の礼や大嘗祭など一連の天皇就任儀式を終えたことを報告する「親謁の儀」を、11月23日に皇祖天照大神を祀る伊勢神宮、同27日には、天武天皇陵で執り行った。そして桃山明治皇陵、泉湧寺の光明天皇陵へと報告した」と書き出している。そして、「最先端のグローバル化する現代社会に適合したその徳仁天皇が、なぜ、皇室の神話上の天照大神の孫であるニニギノミコトとして生まれ変わる大嘗祭を行い、1863年に造営された架空の初代神武天皇の陵を参拝するといった、非合理的な神話をともなう就任儀式を行うのか」と問うている。

高木氏は、天皇制とは特定の家が、生まれながらに貴種とされ、天皇位を世襲する近現代における身分制度であると言う。人は生まれながらに平等であり、等しく人権が尊重される民主主義の原理とは矛盾する非合理的な制度である。非合理的な天皇制は、血統の正当性を担保するために、非合理的な神話を必要とし、「万世一系」の陵墓の体系を生み出した。

高木氏は、2019年7月に倭の五王の一つの墓地でしかなかった大山古墳が「仁徳天皇陵古墳」として世界遺産に登録されたことに疑義を唱えている。「仁徳天皇」は、その存在すら疑わしい天皇である。戦前の教科書で、高台から民のかまどを見る仁徳天皇の姿から「天皇の赤子」としての国民のあり方を描いた神話の復権に、天皇中心の道徳的価値観を説いている。「仁徳天皇陵古墳」は、「仁徳天皇」と倭王古墳が結合したもので、「万世一系」の神話を創りだす、古代と近現代に現れた天皇制支配の物語である。高木氏は、戦前の神武聖跡調査や南朝顕彰・明治天皇聖跡史蹟指定などは、アジア・太平洋戦争後の戦後改革の中で否定され、歴史学の戦後改革のポイントは「史実と神話」の腑分けにあったはずであるが、今再び、進行する日本遺産や「仁徳天皇陵古墳」に見られる歴史意識は「事実と神話」を曖昧にしていると警告している。

10月22日、皇居での「即位礼正殿の儀」が行われた。高御座と御帳台に天皇、皇后が並び立ち、憲法と皇室典范特例法の定めで即位したことを宣誓し、安倍晋三首相が祝いの寿詞（よごと）を読み上げ、万歳三唱した。高御座に安置された三種の神器や、高御座そのものも天照大神の孫ニニギノミコトが命を受け、日向の高千穂に天孫降臨する神話を体現すると解釈され、この神話の下で臣下の服従する儀礼が即位式の意義づけであった。

高木氏は、様々な局面から、近現代の天皇制において「史実と神話」が曖昧に扱われ、徳仁天皇が行った諸々の儀式は、戦前的な天皇賛美と権威づけが見られると分析している。そして、高木氏の論考の結論は、最後の下記の言葉に集約されている。「天皇制の代替わりや文化問題にみられる「史実と神話」の曖昧化は、普遍性のない内向きのナショナリズムをもたらす。それに対して、「史実と神話」の峻別にもとづく人文学の知は、東アジアや世界に開かれたものになるだろう。世界において自国第一のナショナリズムが強まる中で、他者への理解や共存する力が弱まってきている。歴史のなかで繰り返された戦争や惨禍を経験する中で生み出されてきた人文学の知は、様々な国や集団が共存し人類が生きるためにあるだろう。」主権在民とは真逆な天皇式典であると主張する高木氏の論考を、日本と世界の民主主義のために、心して聞き入りたいと思う。